

西会津町富士地区『富士の郷プロジェクト』

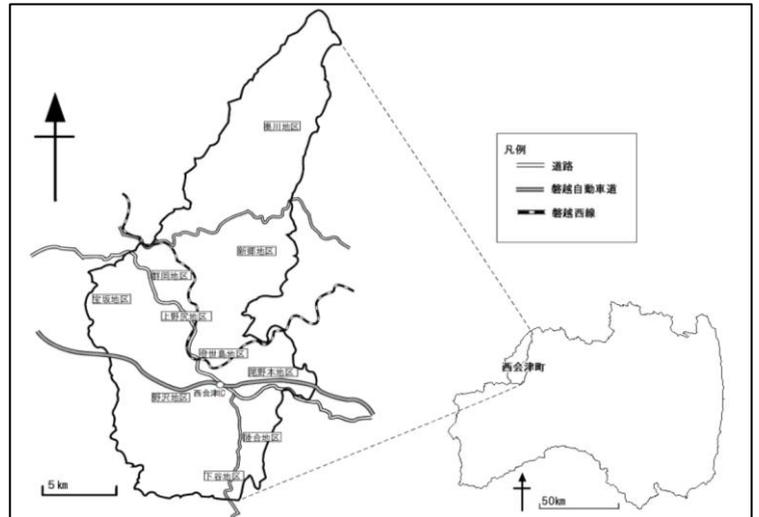
宮城教育大学 小金澤研究室 仙台いぐね研究会

大学院修士課程2年 齋藤史子

I はじめに－西会津会津町富士地区の概要－

福島県西会津町は、福島県の北西端に位置し、福島県喜多方市、柳津町、会津若松、金山町、新潟県阿賀町に隣接している。西会津町の面積は、298.13K m²であり2013年では7539人が居住し、世帯数は2806世帯である。

西会津町の北西部には、飯豊山が聳えており町の中心部からも雄大姿を眺めることができる。西会津町は、町全体が豊かな山林に囲まれており、良質な杉や桐が採れる地域としても有名であった。江戸時代から幕府の指導の下、建材に利用する杉が植林されて、会津桐の名産地ともいわれ林業が盛んに営まれてきた町である。河川をみると、町の中心部を阿賀川が流れている。阿賀川は流路延長が19000mあり、13の支流から水が流れ込んでくる。上野尻発電所が1958年に設置されている為、河川の流は



とても緩やかで朝方になると霧が立ち込め幽玄な景観になる。その川沿いに沿うように新潟県新潟駅－福島県会津若松駅を結ぶJR磐越西線が走り、4月から11月の週末にSL蒸気機関車が通過し多くの鉄道ファンが西会津町の四季折々の景観とSLが入る姿を写真に収めている。西会津町は、日本海側の気候であり降水量も多い。冬期に入ると、平均降雪量は12月で111m、1月では227mである。1968年に最深降雪量の268mを記録している。西会津町全体が、1971年に豪雪地帯地域に指定されている。

交通条件をみると、西会津町の中心には国道49号線が通っており、新潟県と福島県を結ぶ町の中でも主要道路になっている。また、1990年から1997年にかけて、太平洋側と日本海側を結ぶ磐越自動車道が開通した。西会津町でも西会津ICが設置されて、共有を開始した。磐越自動車道ができたことで、福島県の会津地域の中心地である会津若松への往来も40分で可能となった。東北自動車道の郡山ICとは西会津は約1時間で行き来ができる。国道49号線と磐越自動車道によって、交通量も多くなり山間部ではありながら交通の便は周辺市町村と比較しても良いといえる。しかし、恵まれた交通条件であるといえるが西会津町全体でみると地区ごとでも交通条件に差異がある。西会津町は、1954年に新郷村、奥川村、野沢町、小野本町、登世島村、睦合村、下谷村、村岡村、上野尻村、宝坂村が合併し西会津は誕生した。西会津町は、東西に17.6km、南北に34.5kmあり南北に長細い形状をしている。西会津町の北東部にある新郷富地区は、町の中心地である野沢地区に車で30分の移動を要する。冬期になると、豪雪指定地域で標高も高く傾斜のある山間地域を車での移動は危険が伴い、西会津町の中心地である野沢には金融機関や買い物を行うスーパーマーケット、西会津役場が立地しているが容易に移動することはできない。

西会津町は、1965年まで人口は増加傾向で人口が1万9557人であったが、高度経済成長期には人口減少の程度が加速している。年を追うごとに人口は減少し、1995年には1万人を切ってしまった。一方で西会津町の高齢化深刻で、1960年の高齢化率は8.7%から2010年には高齢化率は41.1%まで進んだ。しかし、このような人口減少も高齢化率も町内において一律という訳ではない。西会津町の中心部である野沢は、金融機関や学校機関、役場機能が集中している為高齢化率は36.7%である。人口減少率も2005年から2010年にかけて-8.7%であった。新郷集落地区は、西会津の中央部と隣接し水田が広がる地域と山間部の富士地区の様な集落を有している。高齢化率は44%で人口減少率は2005年から2010年にかけて-12.8%である。

続いて西会津町の就業人口数の推移を見ると、2010年西会津町の産業別総就業人口は3504人である。この45年間の推移をみると1965年の7495人から3991人の減少があった。1960年から西会津町の実業人口数は減少の一途を辿っている。45年の間で減少が顕著なのは、1995年から2000年にかけて5410人から4789人と621人減少している。産業別にみると、第一産業就業者数が2010年では679人(19.4%)、第二産業は2010年の1269人(36.2%)、第三産業は1556人(44.4%)となっている。1965年では第一産業の就業者が4860人(64.8%)、第二産業は902人(12%)、第三産業は1733人(23.1%)となっており、第一産業の比率が高かったが、その後第二産業と第三産業が伸びを示し、第一産業は実数・構成比ともに低下した。西会津町産業別大分別の就業人口数の変化を1965年から2010年まで5年間隔でみた。まず、1965年と2010年とで比較検討する。第一産業の就業者の総数は、1965年の4860人(64.8%)から2010年の679人(19.4%)に45.4ポイントも減少し、第一産業の構成比が大きく低下していることがわかる。農業・林業・漁業を分別して比較していくと、2010年の第一産業の構成比では全体の19.4%を占め、そのうち農業が18.4%を示している。西会津町の第一産業の中心は農業である。西会津町は会津桐や杉の木材の生産地として有名だが、林業従事者は最大で1965年段階110人(1.5%)に過ぎず、2010年には若干増加し36名(1%)となっている。

西会津町における産業別就業人口の推移(実数)											
		1965年	1970年	1975年	1980年	1985年	1990年	1995年	2000年	2005年	2010年
総数		7495	7373	6704	6381	6119	5640	5410	4789	4030	3504
第1次産業	農業	4750	4215	3416	2356	2002	1436	1185	1182	893	643
	林業	110	85	68	69	88	49	23	27	11	36
	漁業	0	1	1	1	1	0	0	0	0	0
	小計	4860	4301	3485	2426	2091	1485	1208	1209	904	679
第2次産業	鉱業	7	16	17	13	15	4	11	8	1	1
	建設業	562	774	803	1175	892	841	1045	685	556	456
	製造業	333	453	646	955	1364	1545	1362	1069	870	812
	小計	902	1243	1466	2143	2271	2390	2418	1762	1427	1269
第3次産業	電気・ガス・熱供給・水道業	84	55	41	27	26	39	31	36	13	35
	運輸・通信業	255	272	244	213	192	161	169	158	85	106
	卸売・小売業	614	684	632	704	635	628	592	576	497	392
	金融業・保険業	25	21	27	31	38	38	29	26	30	21
	不動産業	0	0	1	1	3	4	2	1	2	9
	サービス業	630	638	640	668	676	737	805	865	888	835
	公務	124	159	159	168	180	157	151	153	159	139
	分類不能の産業	1	0	9	0	7	1	5	3	5	19
	小計	1733	1829	1753	1812	1757	1765	1784	1818	1679	1556
西会津町における産業別就業人口の推移(構成比)											
		1965年(%)	1970年(%)	1975年(%)	1980年(%)	1985年(%)	1990年(%)	1995年(%)	2000年(%)	2005年(%)	2010年(%)
総数		100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
第1次産業	農業	63.4	57.2	51.0	36.9	32.7	25.5	21.9	24.7	22.2	18.4
	林業	1.5	1.2	1.0	1.1	1.4	0.9	0.4	0.6	0.3	1.0
	漁業	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	小計	64.8	58.3	52.0	38.0	34.2	26.3	22.3	25.2	22.4	19.4
第2次産業	鉱業	0.1	0.2	0.3	0.2	0.2	0.1	0.2	0.2	0.0	0.0
	建設業	7.5	10.5	12.0	18.4	14.6	14.9	19.3	14.3	13.8	13.0
	製造業	4.4	6.1	9.6	15.0	22.3	27.4	25.2	22.3	21.6	23.2
	小計	12.0	16.9	21.9	33.6	37.1	42.4	44.7	36.8	35.4	36.2
第3次産業	電気・ガス・熱供給・水道業	1.1	0.7	0.6	0.4	0.4	0.7	0.6	0.8	0.3	1.0
	運輸・通信業	3.4	3.7	3.6	3.3	3.1	2.9	3.1	3.3	2.1	3.0
	卸売・小売業	8.2	9.3	9.4	11.0	10.4	11.1	10.9	12.0	12.3	11.2
	金融業・保険業	0.3	0.3	0.4	0.5	0.6	0.7	0.5	0.5	0.7	0.6
	不動産業	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.3
	サービス業	8.4	8.7	9.5	10.5	11.0	13.1	14.9	18.1	22.0	23.8
	公務	1.7	2.2	2.4	2.6	2.9	2.8	2.8	3.2	3.9	4.0
	分類不能の産業	0.0	0.0	0.1	0.0	0.1	0.0	0.1	0.1	0.1	0.5
	小計	23.1	24.8	26.1	28.4	28.7	31.3	33.0	38.0	41.7	44.4

本事業の対象市域である西会津新郷富士地区は、小清水集落と漆窪集落とされている。しかし、今回の調査では集落同士の交流や農地の貸借等で関係の深い泥浮集落も含め調査した。新郷富士地区は、新郷地区の中でも標高が200m以上に位置し、全体の人口は42名、23世帯で構成されている。富士地区の中でも集落規模に差異がある。小清水集落は標高340mの16世帯28人が居住し高齢化率40%であった。漆窪集落は標高273mにあり3世帯6人が居住し高齢化率50%であった。泥浮集落は標高350mに4世帯8人が居住し高齢化率38%であった。富士地区では、居住人口の減少や空き家の増加など高齢化が進み、地域内の元気が失われつつあった。近年の健康志向により低山への登山者が増加していることから、新郷富士地区の

シンボルである富士山への登山客も年々増加傾向にある。大学生の力を活用した集落復興支援事業では、富士山を核とした地域おこしの計画をしてほしいという明確な指針を示されスタートした。

II 富士地区の地域資源の再認識・再評価と課題

1) 寺前自然塾という地域資源

新郷地区には、“寺前自然塾”という組織が存在している。これは、富士地区を含めた新郷地区にある数集落の住民から組織され、都市との交流人口増加させる為に西会津町の伝統の祭事や芸術活動の企画運営を旧新郷中学校の木造の廃校を拠点に行っている。調査を進める中で、新郷富士地区には高齢化と過疎化が進行する中で、地区全体で地域活性化に積極的に取り組む力“人的資源”があることが分かった。東京の世田谷や横浜の鶴見といった都市住民約 100 人が参加できるイベントを企画している。地域の男性陣は力仕事を必要とする祭事の準備を行い、女性陣が草木染や草木染の体験プログラムを企画し実践する。食事時には、手打ちそばや伝統料理を振る舞う。リーダーの言葉は「絶対に無理はしないが、少しだけの無理をする。」が地域活性化の秘訣であると話していた。今後の課題は、第 1 に都市部の交流人口は増加とリピーターを増やす。第二に、地域の人々が経済的効果を実感することが課題であった。第 2 に、地域資源をより多く見出し参加型のプログラムを増やすこと、その魅力を伝える情報伝達方法を見出すことである。



2) 農地という地域資源

2012年7月15日に西会津ならびに富士地区の基幹産業である農業経営に関する調査を行った。富士地区各集落の区長さんに対し、集落内の各世帯の農作物の作付状況・農作業の労働力有無と共同作業への参加率を聞いた。親戚ネットワーク強度を再認識するために、他出した家族状況や帰省頻度についても聞き取りを実施した。結果は、集落内農業労働力は小清水集落在住者 28 名のうち農業従事者は 8 名(専業 7 名・兼業 1 名・平均年齢は 53 歳)、泥浮集落在住者 8 名のうち農業従事者は 2 名(専業 0 名・兼業 2 名・平均年齢は 66. 2 歳)、漆窪集落在住者 6 名のうち農業従事者は 2 名(専業 1 名・兼業 1 名平均年齢は 53 歳)であった。全集落在住者の半数以上が高齢化や他産業に就業しており農作業には従事しておらず、農作業の委託や農地の貸付で農地維持がなされていた。富士地区の集落における共同作業や祭事の参加率については、小清水集落 52%、漆窪集落が 33. 3%、泥浮集落 75%という結果であった。土地利用調査では、経営耕地面積が小清水集落 794a(水田率 89. 4%)、漆窪集落が 560a(水田率 58. 9 %)、泥浮集落 182a(水田率 87. 9%)

であり、土地利用は稲作に依存している傾向であった。耕作放棄地は、最大が小清水集落 354a、漆窪集落が 0a、泥浮集落 70a であった。富士地区は小清水集落が中心となり、中山間地直接支払制度を活用して隣接する高目集落も含めた農作

	小清水	泥浮	漆窪
集落経営耕地面積	794a	182a	560a
うち水田	710a	160a	330a
うち水田率	89.4%	87.9%	58.9%
耕作放棄地	354a	70a	0a

業作業委託等を行っている。しかし、組織化を伴う農地の集約化をも上回る形で耕作放棄が発生している現状が分かった。また、中心となって耕作放棄田の抑制に努めるリーダー的耕作者が、高齢となり農地の集約が限界に近いことが分かった。早期に集落を超えた農業の後継者育成と組織化を進めなければ、富士地区全体の集落協定が崩れ耕作放棄が一気に進行する危険性があることが分かった。富士地区は山間部であることから、農地だけではなく山を個人で保有し所有する林地面積が大きいことも分かった。しかし、普段から過去に植林してきた杉等の間伐や枝打ちといった保全管理の実施や、山の個人所有地の境界を把

握できていないことが判明した。林地の保全管理は農地以上に労働力負担が大きく、また国土保全の観点から考察すると山間部の維持管理は平野の農地や河川の下流地域への影響も大きい。今後は林地面積の把握・維持管理方法の検討も必要と分かった。

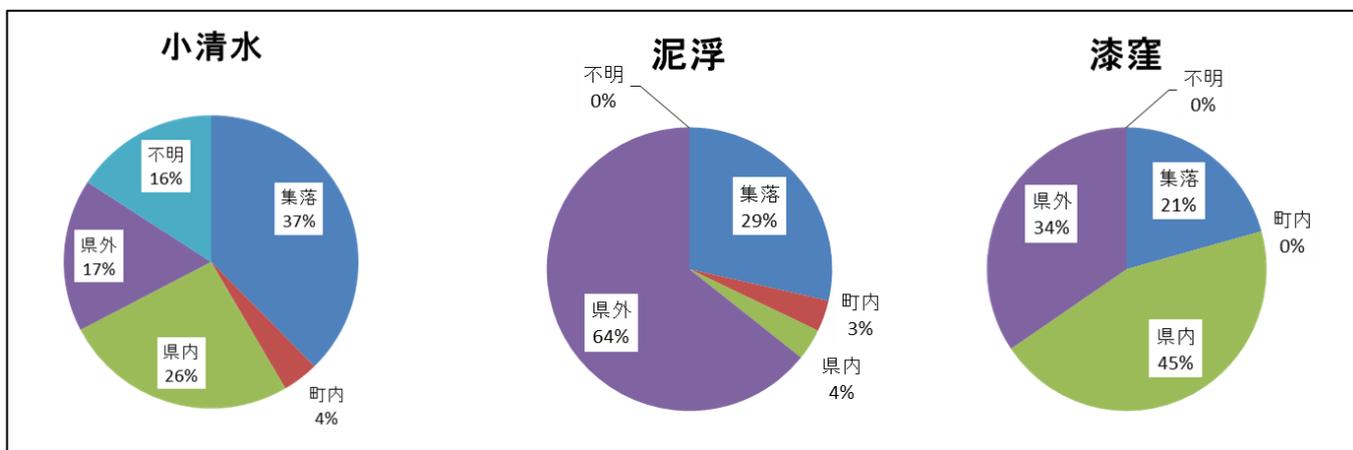
3) 親戚ネットワークという地域資源

富士地区の他出世帯の在住地域と帰省状況を調査結果、小清水集落で47名、泥浮20名、漆窪集落23名おり総計で90名にもなる親戚のネットワークが再認識された。現在の集落在住者の2倍近い数の親戚ネットワークが存在し、集落出身者や家族・親戚の在住地域の構成は、小清水集落在住者が37%、町内4%、県内26%、県外17%、不明が16%であった。

	小清水	泥浮	漆窪
集落在住者	38人	8人	6人
町内	4人	1人	0人
県内	26人	1人	13人
県外	17人	18人	10人
不明	16人	0人	0人
親戚ネットワーク総数	47人	20人	23人

漆窪集落は、集落在住者が21%、町内はおらず、県内45%、県外が34%となった。泥浮集落は、集落在住者が29%、町内3%、県内4%、県外64%を占めている。結果をみると、小清水集落以外は、県外在住者が最大であることが分かった。

今後の中山間地域である富士地区の抱える課題や問題点を、“自分のふるさとの問題”として身近に感じ関心を持ち、最終的には継続的に地域活性化を支える人的資源として関係を構築することが重要と考えた。親戚ネットワークは、前述した都市の交流人口での人的ネットワーク以上に、“血縁”といった強固な関係性がある。IターンやUターン住民として期待が持てる上に、富士地区の農地維持や新たな交流人口としても期待できる。今後の課題は、より地域の魅力を感じ地域に立ち寄る帰省頻度を多くできるかである。地域の課題や問題といった消極的な評価ではなく、郷土への愛着や誇りを持てるような機会を設ける必要がある。



4) 富士山という地域資源

富士地区のシンボル富士山を地域活性化に繋げる取り組みは、地域調査を行う以前から検討されていた。今回大学生の力を活用した復興支援事業では、実際に大学生が標高508m富士山頂上に登山を行い資源としての評価と課題を明らかにした。富士山は富士地区内に2つの登山口を有しており、コースにもよるが頂上まで約40分で気軽に登れることが分かった。道程には、飯豊山を眺めることができる景観が良いポイントもある。しかし、植林後の保全管理がされておらず景観が良いポイント改善する必要性があった。登山口自体が民家の横にあるので見つけにくい上に看板が



景観が良いポイント改善する必要性があった。登山口自体が民家の横にあるので見つけにくい上に看板が

無かった。登山者の安全で楽しい登山を補助する為の登山コースを載せた立て札、地図の等の整備も必要と分かった。2013年には世界遺産に富士山が登録されたのを契機に、世界第2位の高さを誇る富士山にわざわざ横浜から訪れる登山客が確認されている。今後は環境整備に努め、富士地区の富士山のイベント実施や登山客の増加に期待が寄せられた。また、寺前自然塾の協力を受けて新郷地区全体の魅力的な地域資源を巡検し、新郷全体のお宝マップに掲載したい地域資源のヒアリング調査も行った。今後は有効に伝達する手段の形成が課題となった。

Ⅲ “富士の郷宅急便”に向けたプロジェクト

2012年の調査結果を踏まえて、最終目標と各課題の段階的な目標の設定を行った。最終目標を、これまでに関係を構築してきた都市の交流人口と、また地域から他出してしまった親戚ネットワークの人口との関係をより強化し、農産物や地域資源を活かした物品の直接販売、地域資源を活かした学習プログラムへの参加人数の増加を促進とした。その最終目標の上で、2013年度は課題として3つ上げ取り組むと決定した。第1に初年度から依頼があった富士山マップの作成、第2に最終の目標である農産物や物品販売“富士の郷宅急便”の内容の検討、第3に最終目標を達成するにあたって情報の受発信の強化を目的として“富士の郷ふるさと便り”の発行とした。

1) 富士山マップの作成

2012年の登山調査の際には、課題として富士登山口の案内看板の設置や眺望の良い場所の景観整備等が上げられていた。2013年度は、富士山マップの作成上で必要な記載情報の確保を目的とした再調査を行った。登山口別に手分けをして頂上を目指した。その結果、隣町の登山口に通じる登山コースがあり、そこには登山口案内の看板や登山コースの立札も設置されていることが分かった。また、富士山頂上には胎内くぐりができる石の祠があり、登山コースには戊辰戦争の戦場となった陳ヶ峰跡地といった歴史遺産があることも分かった。また、最長登山コースでは2時間30分もの時間を有するので、夏などには登山者にとって水の確保が必要となる。その際に利用できる清水ポイントも新たに発見することができた。富士山マップには、登山者にとって必要な情報として富士山の登山口、コースと頂上まで掛かる目安時間、等高線や登山口までの車での行程情報、駐車場と温泉施設とトイレ休憩が可能な場所の紹介を掲載した。今後の課題は、富士山マップの情報を必要としている人の手に地図をいかにして届けるかである。これには、西会津町の行政とグリーンツーリズム協議会と協力し情報を拡散していきたい。また、富士山を活用したイベントも、冬のスノートレッキングは開催し地図も配布された。今後は、隣接し富士山を共有する高郷町との連携を図っていくことが検討されてきている。富士山イベントを増やし、都市の交流人口や親戚ネットワークが活性化されることに期待している。



2013年度 福島県委託事業・大学生の力を活用した地域活性化事業
宮城教育大学小倉海研究室 協同いぬ研究会

2) 富士の郷宅急便の内容の検討

富士の郷宅急便の実現に向けて、富士の郷の代表的な郷土料理や野菜や加工品について富士地区の方々にはヒアリング調査を行った。春夏秋冬の季節ごとにふるさとを連想させるものを一覧にすると、春にはワラビやゼンマイといった中山間地の特産である山菜があった。またそれを加工した味噌漬けや水煮などがあがること、問題点は衛生的に加工され運搬配達される方法の検討やレシピの必要性など多くが上げられた。今後出荷方法や出荷体制の検討と、販売にあたり消費者が求める商品は何かをマーケティング調査が必要である。まずは富士の郷ふるさと便りの作成時に、親戚ネットワークや都市部に交流人口に向けて情報を発信するだけでなく、お便りコーナーを設けて住所やメールアドレスを記載、FAX 番号も載せて宅急便に対する意見等を受信する体制を整えるようにした。



	主食	野菜	加工品	特産品	
春	・赤飯	・ふきのとう ・菜の花 ・わらび ・ぜんまい	・タラの芽 ・こしあぶら ・しおで	・山菜の水煮 ・味噌 ・ふきのとう味噌 ・大根もち ・山菜(あく抜き済み)	・練の山椒漬け
夏		・新じゃがいも ・きゅうり ・トマト ・キクラゲ ・そうめんかぼちゃ	・トチの実 ・ナス ・ニラ	・茗荷の甘酢漬け ・みそ	・いも三五八
秋	・栗ごはん ・新米 ・新そば	・栗 ・ぜんまい(苦味→水処理) ・木耳 ・椎茸	・青じそおにぎり ・そうめんかぼちゃ味噌漬け ・山椒の実塩漬け		・身知らず柿
冬	・餅 ・餅豆	・原木なめこ ・椎茸 ・大根	・味噌 ・くま漬け ・もちまめ ・うち豆 ・濁酒 ・くるみ餅 ・姫くるみ		・干し柿

3) 富士の郷ふるさと便りの発行

富士山マップにおいての課題、富士の郷宅急便での課題でも、地域の資源や魅力を外部へ伝達することや必要な情報の要素を知ることが上げられた。富士地区では、長年に渡って寺前自然塾でのイベント等で培った都市との交流人口とのネットワークと、富士地区で幼少期を過ごした同郷を共有する親戚のネットワークを発掘し情報を“お便り”で発信することが決定した。2013年1月に創刊号を発行し、年間4回春夏秋冬・四季折々の地域の情報を掲載し届ける計画を上げた。年間で掲載する記事の内容を一覧にし、地域の方々と検討し創刊号の記事の編集作業をメールやFAXや電話を活用し行った。創刊号は、地域の方々が他出した親戚や交流人口で関係を深めてきた方々など60名に郵送した。その後返信やイベント情報を求める声や近況報告などが寄せられてきている。今後も安定的な便りの発行に向けて、取材や記事の作成の体制を整えるのが課題である。

	行事	特集	話題	歴史	広場	宅配便
創刊号	創刊の挨拶	富士山MAP・歴史	歳之神	胎内くぐり	情報募集	宅配便の予告
春号	・菜の花祭り ・富士の山開き	春の食文化(行事食) 料理写真(菜の花ちらしのおにぎり)	田植え	漆の墓	グリーンツーリズムの参加者の声 東京在住者からの便り	①山菜アスパラ ②山菜加工品・山菜ごはんの素 ③山菜のあく抜き
夏号	・盆踊り ・集落の夏祭り	伝統工芸 からむし工芸 名刺入れ 草木染	獣害の被害	峠道	郡山からの声	①トマト・ソウメンカボチャ・キュウリ ②芋三五八・ミョウガの甘酢 ③シソジュース
秋号	・新蕎麦祭り	秋の食文化(蕎麦・きのこ)	新米	新郷の神様	夏祭り参加者の声	①キノコ・新米・そば(粉)胡桃 ②キノコご飯の素、胡桃、栗 ③稲穂・そば殻枕
冬号	・歳之神 ・雪国祭り	富士地区の伝統行事の暦	雪下ろしの費用で町の財政悪化	戊辰戦争	雪下ろしツアー参加者の声	①冬の野菜一味 ②おかき・漬物・練山椒 ③巻むし織り

IV 大学生の力を活用した集落復興支援事業での成果と課題

2013年度の最終目標である“富士の郷宅急便”の実現に向けて、3つの段階的な目標を設定し実践してきた。その中で様々な課題が見えてきたが、解消する過程で大学生の力を活用した集落復興支援事業のそのものが持つ課題を見出すことができた。1つは、地域からの要望に適切に応える為には、行政との連携や地域の人との交流を多く持ち多様な意見や見解を知らなければならないこと。2つ目は、地域の地域資源を活用する以上は伝統や習慣について学ぶ必要があることだ。これは、お便りやマップを作成して実感したが、地域の歴史や自然条件、農業や産業についても予備知識や体験に基づかないと、地域の人が伝

達したい内容にならないということだ。私たちは地域協力と支援体制を受けて、普段仙台ではできない体験を沢山させて頂き成果品を作成することができた。今後の最大の課題は、大学生は卒業し就職をして大学から離れてしまう。これまでに培ってきた地域の知識や見聞を新たなメンバーに効率よく伝達し、新たに人的ネットワーク構築していることである。大学生側が頻度は減るとしても、継続的に地域へのサポート体制を取れるように組織化ができるかである。そして何より、大学生自身が地域にお世話になりながら学ぶことの意義を認識し行動できるかであると考えた。

富士地区では、旧・新郷小学校が国際芸術村をして芸術活動や地域の拠点として活用されている。私たちが調査で入っている中で、新たに西会津出身者で情報発信やイベント企画等で地域おこしをされる人の存在を知った。地域の中に存在する人的資源と大学生自身がネットワーク構築協力し、持続した地域に根差す支援体制が取れるよう努めていきたい。

地域の皆様へ

最後に、この新郷富士地区の大学生の力を活用した集落復興支援事業で多くの事を学ばせて頂きました。富士地区の皆様には、集落を訪問するたびに笑顔で迎えて頂きました。大勢の民泊にも対応して頂きました。美味しい料理とお酒も最高の思い出ですが、囲炉裏を囲んで集落の歴史を聞かせて頂いたことや、標高 300m 以上の所に先人が築いた棚田の写真を見たときの感動は忘れません。集落のお母様方には、郷土料理の調理方法を教えて頂き、また草木折りや葉タバコの栽培過程の大変さなど知り得なかったことも教えて頂きました。貴重な体験を沢山させて頂いたこと大変感謝しております。

今後社会に出た時に、それぞれ道は異なりますが活かして参ります。今後とも、地域を訪れる時にはご連絡致しますので何卒宜しくお願い致します。本当にお世話になりました。有難うございました。

宮城教育大学 小金澤研究室
仙台いぐね研究会一同

